写真①
豆乳をしぼる様子。昔ながらの豆腐づくりも、魅力的な観光プログラムになる。
写真②
小動物調査のための巣箱設置。環境教育の一環として子供も参加している。
写真③
地域の伝統芸能や行事は、特に外国人からの人気が高い。
写真④
見慣れた満天の星も実は当たり前ではない。遊四季多里は、この贅沢を皆さんにも知ってもらいたいと星空観察などのイベントを実施している。

特集　エコツーリズムで創る未来

平成 31 年 3 月、町は動植物の保護に取り組む団体や観光協会と共に、にちなんエコツーリズム推進協議会を発足させ、活動がスタートしました。
本特集では、「エコツーリズムとは？」「何のために協議会を作ったのか？」「今、どんな活動をしているのか？」などについて解説します。

オオサンショウウオは国の天然記念物なのに守られていない？

日南町には、オオサンショウウオやヒメボタル、野生のサクラソウなど希少な動植物やその生息地があります。オオサンショウウオやホタルは60年前には至る所で見ることができるものでした。この60年間で何が起こったのでしょうか？人間の利益を優先した開発により、彼らは住む場所を奪われ、今では限られた地域でしか見ることができなくなったのです。日南町にはその限られた場所が多く存在します。それらの一部は今、地元の住民や保護団体、研究者の努力によって守られています。

しかし、これらの場所は、国立公園や○○保護区のように法的な保護を受けているわけではなく、危うい状況にあります。また、オオサンショウウオのようにそのもの自体は特別天然記念物に指定されてはいるものの、住処である川の開発を規制するようなルールは定められていないので、法律で厳格に保護されているにも関わらず、その生息域は年々狭くなっています。

そこで、町の財産であるこれら希少な動植物をその生息環境も含めて守っていく「しくみ」を作るために、町と保護団体、観光協会が中心となって昨年3月、「にちなんエコツーリズム推進協議会」を立ち上げました。

～なぜ守るのか？～ 守ることが町の未来につながる

町が税金を使って生物の保護活動を行うのはなぜでしょうか？

生物の保護は行政の義務だからです。また、それと同じくらい重要な理由が、希少な動植物を町ぐるみで保護することが、町のブランディング、つまり、外から見た町の価値を高めることにつながり、ひいては町の誇りと成り得るからです。

新潟県佐渡市では、環境保全型農業を行い、トキの野生復帰のための活動を続けています。ここで作られた米は、「朱鷺（とき）と暮らす郷認証米」としてブランド化され、通常よりも高い値段で取引されています。佐渡市のイメージアップや宣伝にも大きく貢献しています。

あのダーウィンが「進化論」を提唱するきっかけになった島としても有名なガラパゴスでは、ゾウガメを見に来るお客さんから得た収益の一部をその保護にあてるしくみを作っています。貧しい漁村だった時代には、ゾウガメはただの食料でしたが、それを守ることにより、今ではその地域自体が地球の宝だと世界から認められるまでになっています。

山上では地域ぐるみで遮光ネット設置や草刈などの保護活動を続けている。

ホタルの幼虫調査。資源量や生態などの調査の積み重ね、より良い保護の方法を模索する。

町の宝をお年寄りからの聴き取り。

～守るために必要なこと～ 科学的知見に基づいたルールをみんなで作ること、経済的損失を補填できるしくみを作ること

重要なことは、開発したい側にも守りたい側にも町民がいて、それぞれの利益があるということです。治水事業であれ、農林業であれ、観光業であれ、開発のルールやガイドラインは、利害関係者の合意を得たものでなければなりません。

開発に着手する際には、両者が話し合う場も必要になります。また、ルール作りや話し合いは、科学的な知見や根拠に基づいて行う必要があります。